

# 日本最古の道

～山の辺の道をさぐる～

50期生

## I テーマ設定の理由

三輪山の山ろくから大和盆地の東の美しい山なみにそって奈良へ通じる道は、「山の辺の道」と呼ばれ、日本最古の道とも言われる。それは、ひきこまれそうになる程素敵な道である。古代、たぶんにぎわったと思われるこの道は、どうして奈良盆地の中央ではなく、山沿いに造られたのだろうか。ハイキングに行った時にこの道の近くに古墳や皇居跡を見かけたが、それは一体なぜなのか。この道はどんな役割を果たしていたのか。そのようなことを知りたいと思い、設定した。

## II 研究方法

- (1) 予備知識 2万5千分の1の地図上に、山の辺の道周辺の皇居跡や御陵にマーカーで印をつけ、実地調査のための資料づくりを行う。
- (2) 文献調査 ①「万葉びとの生活」を中心に、当時の人々の生活の様子を知る。  
②「日本書紀」に詳しい清水良三氏（私の祖父）から現代語訳の関連か所を教えてもらい、古代の天皇の皇居と御陵の場所を調べる。  
③「大和の古道」、「街道をゆく」などから奈良の古道について調べる。
- (3) 現地調査 ①山の辺の道を実際に歩き、道幅・川幅の実測や皇居跡の方位を調べる。  
またカメラに撮る（現地調査は桜井～天理までとする）。  
②石上神宮で聞き取り調査を行う。

## III 研究内容

### 1. 当時の人々の生活と山の辺の道についての疑問

「万葉びとの生活」という本を読み、当時の人々の生活の様子を想像して、山の辺の道に関連づけて考えてみた。石上神宮での聞き取り調査によれば、当時山の辺の道の西部の平たん地は湿地帯であったということであるから、そこに苗代を作り、水田に田植えをしたのだろう。山ぞいの崖や傾斜地には、田植えをせずに直まきをしたのだそうだ。ここで収穫した稲はどうなったのか。山の辺の道を使ってどこかへ運ばれたのだろうか。租・庸・調について調べてみた。租は稲で、地方財政の財源であり、都に運ばないのが原則であった。米は重いので、山の辺の道を背負って運ぶことはなかったと思う。大部分は地方の倉庫に入れ、国司が管理した。庸・調は絹や布、地方の特産物などで中央財政の財源となる。これらが山の辺の道を利用して運ばれたとは考えられないだろうか。では何で運ばれたか。力車という説がある。力車とは、「荷物を載せて人が後ろから押していく車」「物を積んで人の力で引く車」「租税（ちから）を運ぶ車」などの意味がある。山の辺の道を3か所で実測してみたら、3.5メートル、1.5メートル、1.3メートルだった。この3.5メートルという道幅は後に自動車などが

通るために広げられたものであった。昔から残っていそうな道は1.3メートルの道幅の所だった。だから昔の山の辺の道の道幅は、約1.2メートル~2.0メートルぐらいだったのではないだろうか。この狭い道はどういう役割を果たしたのだろうか。

## 2. 古代の皇居跡について

### (1) 天皇の皇居跡・御陵と山の辺の道

予備知識として、国土地理院発行「奈良」「大和郡山」「桜井」の2万5千分の1の地図を買い、大和盆地の東に連なる山ぞいの道とその周辺を調べた。その結果、古代天皇の皇居跡が多いことがわかった。そこで「日本書紀」の現代語訳をたよりに、第1代から第23代までの天皇名と皇居、御陵の場所などについて調べた。それを地図上にプロットしてみると、図1のようになる。

#### 第1代~第23代までの天皇名

1代 神武天皇	2代 綏靖天皇	3代 安寧天皇	4代 懿徳天皇
5代 孝昭天皇	6代 孝安天皇	7代 孝靈天皇	8代 孝元天皇
9代 開化天皇	10代 崇神天皇	11代 垂仁天皇	12代 景行天皇
13代 成務天皇	14代 仲哀天皇	15代 応神天皇	16代 仁徳天皇
17代 履中天皇	18代 反正天皇	19代 允恭天皇	20代 安廂天皇
21代 雄略天皇	22代 清寧天皇	23代 顯宗天皇	



▲図1 天皇(1代~23代)の皇居と御陵の所在地

これによると皇居跡は、天理市と桜井市の間に8か所もある。そのことから、山の辺の道ぞいにたくさんの皇居が存在していた様子を想像してみると、その皇居に物を運んだりするために山の辺の道が利用されたのではないかとすることも考えられる。そこで、皇居跡の場所を実際に見てまわることにした。

### (2) 崇神天皇の磯城瑞籬宮跡

崇神天皇の磯城瑞籬宮跡の標識が、桜井市の金屋付近に立っていた。その近くを見回してみると、広い皇居が昔に建てていたとは思えないような所だった。そこから考えると、昔の皇居は平城京や平安京のように広くて大きなものではなくて、1代限りの短い期間だけの小さなものではなかったのだろうか。(写真1)

▼写真1 崇神天皇磯城瑞籬宮跡



▼写真2 垂仁天皇珠城宮跡



### (3) 垂仁天皇の珠城宮跡、景行天皇の日代宮跡

垂仁天皇の珠城宮跡と景行天皇の日代宮跡は、どちらも巻向にあり、あまり遠くない位置に東西に並んでいた。この辺りは田んぼや畑ばかりで、昔皇居があったと思わせるようなものは何もなく。ただ石碑がポツンと立っているだけである。これもまた、1代だけの簡単な建物として造られたのだろう。(写真2、3)

### (4) 三輪王朝と山の辺の道

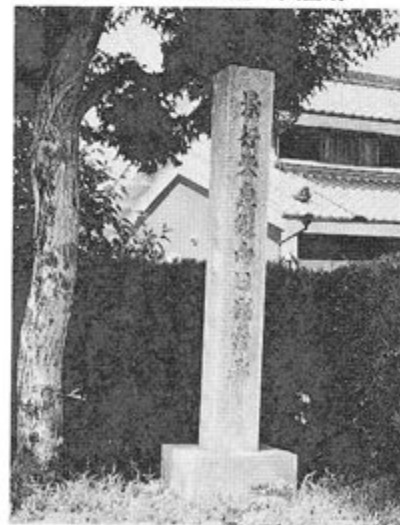
この崇神天皇・垂仁天皇・景行天皇と続く三代の時期は三輪王朝と呼ばれ、この地方で大きな力を持っていたらしい。三輪王朝について文献調査した結果、「山の辺の道の中ほどにある三輪山のふもとにできた初期大和王権」であったということや、「崇神王朝の首都が三輪山のふもとの三輪の地にあった」ということがわかった。

また、三輪山が間近に見える地域は「やまと」と呼ばれ、大和朝廷発祥の地であり、その初めが、山の辺の道の近辺にできた三輪王朝である、とも書かれている。(1996年2月20日、産経新聞夕刊の記事)

やがて応神王朝が勢力を伸ばして三輪王朝は滅びるが、以上のことから、山の辺の道は三輪王朝が栄えた時期につくられたものと考えられる。

後の方にも書いているが、時代が進むとこの地域には、上ツ道、中ツ道、下ツ道など、道路として整備されたものが現れてくるのである。

▼写真3 景行天皇日代宮跡



### 3. 御陵について

#### (1) 山の辺の道（天理～桜井間）にある御陵

図1からわかるように、天理～桜井間にある御陵はわずかに3か所だけで、その数は少なかった。（実際に地図上にプロットしたのは2か所だが、箸墓を合わせると3か所となる）古い時代には橿原市に多く、その後は奈良市や大阪府に多い。けれども、天理～桜井地区の古墳の規模は大きく、三輪王朝の力が強かったことが考えられる。

#### (2) 箸墓について

垂仁天皇珠城宮跡と景行天皇日代宮跡の近くの巻向辺りに箸墓と呼ばれる大きな御陵がある。別名、「倭迹迹日百襲姫命墓」と呼ばれている。現地に行ってみると「大市墓」と書かれていた。全長280メートルの巨大な前方後円墳である。箸墓にほうむられている人は倭迹迹日百襲姫とされるが、邪馬台国の卑弥呼の墓ではないかと書かれている文献もあった。

#### (3) 景行天皇陵について

景行天皇陵は、全長320メートルの巨大な古墳で、三輪王朝の最盛期を示す遺跡である。ここからの眺めはすばらしく、のどかな田んぼの風景と山々の景色と緑が広がっている。古代の奈良（大和）をほめたたえた歌として有名なものの1つに

大和は 国のまほろば	【大和は 最もすぐれた国 青々とした山が重なって 垣のように 包んでいる大和の国は 立派で美しい。】
たたなづく 青垣	
山隠れる 大和しうるわし	

という歌がある。「日本書紀」によれば、この歌は景行天皇が作ったとされている。

#### (4) 巻向遺跡について

巻向遺跡は、1キロメートル四方の大集落遺跡で、古墳を作った人たちが住んだと言われている。ここからは大きな溝や日本各地の土器が出土していて、首都的性格を帯びた大集落であったらしい。箸墓や天皇陵を造りに行く人たちが、山の辺の道を使い、往来したり材料を運搬したりしたのであろう。

### 4. 大集落地について

- (1) 海石榴市は現在のJR桜井駅の近くにあり、山の辺の道の起点（あるいは終点）としておおいに栄えた所であるらしい。この海石榴市の近くに初瀬川が流れている。この川幅を測ってみたところ約34メートルもあり、とても大きい川であった。大阪湾へ通じるこの大河には物資を運搬する舟が大いに利用されていたのだろう。海石榴市はこの初瀬川の舟着き場であったのだ。ここはたくさんの街道が集まっている大集落地であり、大いににぎわい、春や秋には若者が集まり、歌をよみ交わした歌垣の場としても有名である。海石榴市には次のような歌が残されていた。

紫は 灰さすものぞ 海石榴市の 八十の街に 会へる児や誰

#### (2) 石上神宮について

私の今回の研究で海石榴市を起点と考えると、石上神宮が終点となる。その石上神宮の神主さんから聞き取り調査を行った。それによると、ここは2050年ぐらい前に建てられた日本で最も古い神社であり、朝廷の大きな武器庫があったそうだ。その武器庫を造らせたのは崇神天皇である。その崇神天皇も山の辺の道のここから

近い所にある。崇神天皇は豪族から武器を差し出させてここに納めたらしい。垂仁天皇も、剣一千本を納めたそうだ。この武器庫を守っていたのが、天皇家の軍事をつかさどる豪族である物部氏である。その後、武器が増え、百済の王から七支刀（ななつさやのたち）が送られたそうだ。現物は見れなかったが、写真が飾られていた（写真4）。

▼写真4 七支刀



これらのことから、この神宮自体が戦いのトリデであったと考えられる。だから三輪王朝が敵と戦う場合には、兵士が山の辺の道を利用して石上に集まり、武器を持って出陣していったのではないかと思う。ここが三輪王朝にとって重要な拠点であったことはまちがいないと思う。

### 5. なぜ山沿いに道を作ったのか

石上神宮の神主さんの話では、大和盆地は古代、湖であり、山すその高い所に集落ができ、それを結んでできたのが山の辺の道であるということだ。この辺りは現在も池や川が多いため、古代は湖や沼や川の多い湿地帯であったかもしれない、ということは想像できる。そのころはまだ堤防の工事や溢乱を防ぐ技術はなかっただろうから、雨がたくさん降ると、低地では泥の海ようになってしまうのだ。だから人々は山のふもとに住むようになり、生活も安定し、そしてそこに山の辺の道ができたのであろう。

この話をうらづける1つの事柄として、文献によれば、「低湿地帯＝磯」の上にある地だから「磯の上＝石上」となったのではないか、という話がある。これもなるほど、と思う。

大和盆地には水に関する地名が結構多い。

▼写真5 今も残る山の辺の道



### IV 結論

これまでのことから、山の辺の道は文化都市である海石榴市と、軍事基地(?)である石上神宮を起点と終点とするとは考えられないだろうか。つまり、3世紀後半から4世紀に存在した三輪王朝の文化と軍事にかかわる重要な役割を、果たしたのではないだろうか。低地をさけて山のふもとに造られた理由は水害をさけるためであると考えられ

るだろう。この付近に皇居跡や御陵が多く見られるのは、4～5世紀にこの地に三輪王朝が栄えており、勢力の強さを示すものだからであろう。しかし、飛鳥に政治の中心が移り、推古天皇時代に上ッ道、中ッ道、下ッ道（図2）が造られ始めた頃から、山の辺の道はその役目を終えることになった。今はただ、私たちを楽しませてくれる道として残っている。



▲ 図2 大和における古道と宮都  
(岸俊男「大和の古道」より)

## V 総括

畷傍山、耳成山、香具山そして三輪山。これらの山々は低い山ではあるがとても美しい山で、山の辺の道を歩く私たちの心をなごませるものだ。付近を流れる巻向川は川幅が6メートルぐらいで今の水量はとても少なくなっているが、その水はすきとおるように美しく、手ですくってみたら冷たくさわやかであった。小魚が200～300匹ぐらいで群れをなして泳いでいた。

この美しい自然、そして古代の歴史を思わせる貴重な文化遺産を、私たちは今の姿のままで残していかなければならない。そのためには、この美しい自然を破壊するようなことは絶対にしてはいけないと、強く思った。

## ・参考文献

- ・青山茂（1989）「奈良の街道（上）」草思社 pp.226-275
- ・阿部猛（1995）「万葉びとの生活」東京堂出版
- ・犬養孝（1976）「山の辺の歌碑をたずねて」タイムス
- ・犬養孝監修・扇野聖史著（1982）「万葉の道（巻の二）山辺編」福武書店
- ・小川光三（1988）「大和路散歩ベスト8」新潮社 pp.74-89
- ・金子保編（1968）「真珠の小箱・奈良・大和路」学芸書林 pp.30-51
- ・黒岩重吾（1993）「古代浪漫紀行－邪馬台国から大和王権への道－」講談社文庫 pp.153-190
- ・小山和（1994）「古道紀行・大和路」保育社 pp.19-60
- ・崎山祐宏（1995）「山の辺の道文学散歩」綜文館 pp.33-40、71-79、85-90
- ・佐藤亮一（1989）「道の風土記」新潮社 pp.230-233
- ・司馬遼太郎（1978）「街道をゆく1」朝日新聞社 pp.45-70
- ・直木孝次郎（1971）「奈良－古代史への旅－」岩波新書 pp.13-40
- ・日本古典文学大系（1967）「日本書紀（上）」岩波書店
- ・前登志夫（1985）「大和の古道」講談社 pp.162-185
- ・児玉幸多編（1988）「標準日本史年表」吉川弘文館
- ・児玉幸多編（1988）「標準日本史地図」吉川弘文館